

長澤 悟 教授

工学部 建築学科

学校建築から、教育現場の
「新しい価値の創造」を担う

小・中学校時代と訊かれ、脳裏に浮かぶことは――。先生のこと、クラスの仲間のこと、そして机と椅子が一杯に並んでいた教室の風景だろうか。ところが、思い出の中の教室の風景は、ことにすると時代によって、少しずつ様相が異なっているかも知れない。義務教育の現場は、社会の変化に伴いその姿を変えてきた。教育内容だけでなく、建物というその「器」までもだ。

学校とは何かという問いに建築の立場から大きなうねりを先導してきた、長澤悟教授に訊いた。



(ながさわ さとる)

1948年生まれ。東京大学工学部卒業。同大学院博士課程修了。日本大学工学部教授を経て1990年より現職。専門は学校建築計画、地域施設計画。

大学時代、恩師との出会いが学校建築の研究を始めるきっかけに。地方の先進的な学校を訪ね歩き、卒業論文のテーマに据えて以来30年以上、学校建築の研究に携わるとともに、全国各地で教職員、地域住民が参加する学校づくり、地域づくりを指導してきた実績を持つ。



グループでも個人でも、多様な学びのスタイルに対応
(大洗町立南中学校のメディアセンター)

学校といつとすぐに思い浮かぶ「マッチ箱」にも似た教室は、戦後、多くの子どもに平等で均質な教育を受けさせるために、限られた予算と量的整備に追われながら造られたものだ。「一人ひとりの『個』を尊重した教育」が注視されるようになったのは、大学生のみならず生まれる少し前、昭和60年代にさしかかる頃から。「鉄筋コンクリート造りの標準設計による画一的な校舎では、教育も『辺倒になる』とされ、注目されたのが1970年代のアメリカで先行していた、オープンスクールという考え方だった。

従来の教室はすべて、細かく分断されていたが、廊下を広げ、時には壁を取り払い、多目的スペースとして使用。広い空間で、教育の自由度を上げ、思い思いに課題に取り組むことで、個性を伸ばせるものと考えた。今や、学校にオープンスペースを設けるのは当たり前だが、当時は、教育における「個」と「集団」をどう考えるか、価値観の転換を迫る取り組みだった。

この頃、長澤教授は全国のオープンスペースの先進事例を調べながら、「建築が人間の活動の仕方までも変えてしま

う」に心を震えを覚えた。

「安定した価値のものを設計するだけではなく、建築を通して、新しい社会の変革を担える」と実感したんですね。時に社会の変化にもっとも鋭敏な反応が求められるのが、その社会の構成員をつくる「教育」。教育の変革、社会的課題に対応した学校建築が、生涯のテーマになった。

平成に入ると、学校施設は勉強の場だけでなく、トータルな成長の場としてのとらえ方が広がってゆく。豊かで潤いのある生活の場を、目指した水まわりの改善。生涯学習の拠点としての地域開放。少子高齢化に伴う地域福祉を担うための空き教室の活用。また災害における避難所という役割が高まれば、安全性だけでなく、新たに「ライパシー」の問題や情報収集機能などの要素が加わる。そのたびに、対応したプランを練り、学校建築のあり方を模索する。



「学校にいる間は我慢、なんてもう昔の話!?」
(横須賀市立大塚台小学校のトイレ)

さらに21世紀に入ると、新たな問題が噴出した。大阪教育大学附属池田小学校での児童殺傷事件以降、誰もが安全だと信じて疑わなかった学校を舞台に凶悪事件が頻発するようになったのである。「学校はあまりにも開放的すぎる」といつ世間の声が高まった。その矢面に立つて、「開放性」を唱え続けたのも、長澤教授その人である。「無防備と開放とは違う。学校は安全性を守ると同時に、地域との関わりを閉ざしてはいけない! 学校は人々の心に根付いた地域の核となる存在。住民の目があってこそ、子どもを守れる。鍵をかけた無関心ではならないのです」と語る。

21世紀地球社会の大きな問題、環境への配慮も、学校建築にとって重要な課題だ。太陽光発電の活用や、屋上緑化などの工夫を取り入れた、エコスクールが広がる中で、長澤教授を中心に取り組む。学校建築を主軸とした「木・共生学」の社会システムの建築と実践が、平成19年度文部科学省オープン・リサーチ・センタリーに採択された。いま、建築に木を使うことが推奨されているものの、生産者には売値が安過ぎ、使う側はコストが高いという矛盾が生じている。「大量の木材を必要とする学校建築を切り口に、木を使いやすい社会システムを構築することは、里山保全、環境教育、地域活性化など幅広い効果があります」。

日々、各地から学校建築への提案を求められる。意識の変革を迫る提案内容が、激しい議論を生み、反対意見にもさらされる。しかし長澤教授は穏やかに語る。「むしろ意見をくれる情熱を持つ人がいることを大切に思います。学校教育の中に新しい価値を創造するための、よい波風を立てる役割でありたいですから」。